

必要である。

分析に用いた主な史料は、GHO/SCAP RECORDS の「Public Health and Welfare Records」（一九四五年七月二八日より一九五一年八月八日まで）、「看護学雑誌」、「看護」、「The Johns Hopkins Nurses Alumnae Magazine」、聞き取り調査(Heaver, A.D.、金子光、平井雅恵、大嶽康子、高橋シュン、岡田菊江、滝澤稔子他)、書簡(Ohlson, V.M.、榎秀子他)である。

一、オルトの看護思想形成に影響した要因

オルトが看護教育を受けた時期は、アメリカにおいて一九二七年の全国看護教育連盟の勧告に基づく看護教育の改革が行われた時期であった。オルトはジョンズ・ホプキンス看護学校を卒業後、大学において公衆衛生学を修めており、当時としては高レベルと言える教育を受けていた。オルトは、メソヂイスト派教会のミッシヨナリーとしてアジアにおける看護改革や看護教育に意欲を持っていた。また、第二次世界大戦前、日本の支配下にあった朝鮮半島において看護職に従事した経歴があり、当時の聖路加国際病院看護婦たちとの交流もあった。

二、オルトの看護思想

オルトの看護思想には「看護は芸術であり、科学であり、専門職業である」というナイチンゲールの看護思想、ゴールドマーク報告、フレックスナーの専門職の基準が影響していると考えられた。また、オルトはアメリカ看護の発達過程が日本の看護政策のモデルとして適切と考えていた可能性があ

る。

三、オルトの看護思想と看護政策との関係

オルトの看護思想は看護教育審議会に反映され、政策化された。免許制度の改善、看護教育制度の改善、再教育コース、看護の職業団体の組織化、厚生省看護課の設置などの看護政策は、看護の水準を上げ看護職を専門職にすることを目指したものであった。

(平成十二年五月例会)

吉益東洞と道家・道教思想

館野 正美・大山 昌道

いわゆる「道家・道教思想」の思想は、中国古代の思想家である老子や荘子らに由来する哲学思想と、これ又中国古代に淵源するところの中国の民間宗教とが、あるいは単独に、あるいは両者相俟って織りなすところの、中国思想における一大潮流である。かたや吉益東洞の医学思想における中国古代理思想の影響は、既に先達によって、そして又拙稿によって、いささかこれを概観され来たつてはいるものの、更に詳細に亘る分析は、未だ多くを見ていないように思われる。そこで以下において、まず道家・道教思想に対する東洞の発言を概観し、次いで彼の医学思想と道家・道教思想とを対比して、その内容を比較検討し、以て彼の医学思想の特質の一端を明らかにしてみたいと考えるものである。

いわゆる道家・道教の思想について、東洞は、最も基本的には、いわゆる「隱遁・隱棲」のイメージを持っていたことが窺われるが、更に言えば、それは、葛洪や陶弘景等といった学者たちの「養性の説」(「神仙養性の説」)であり、更に具体的には、山中に隱棲して「草根木皮」を食し、「補氣養生」して「延命長寿」を求めたものであるとして捉えられていたように考えられる。

とはいえ、更に付言すべきは、これらの道家・道教の思想の影響を受けて、本来あるべき「疾医の道」(「医道」)が廢れてしまった、とされていることである。道家・道教の思想は、かの陰陽五行説ほどではないにせよ、東洞の意識において、決して好感を以て迎えられるてはなかったのである。果たして更に、

仙家医は氣を煉、或は煉丹を服し、人をして造化にひとしくせん事を学ぶゆへ、行ふ人すくなく害も亦すくなし。葛洪陶弘景孫思邈等是なり。(「医事或問」、卷上)

と言われるのも、彼の右のような考え方を敷衍するものであるが、続けて、

夫疾医は万病唯一毒といふ事を疑なく會得し、此薬方にて此病毒解するといふ事を心に覚るゆへ、病治せざるなし。(同前)

と、彼の「万病一毒」の理、延いてはその「医道」の真髓を「會得」し、「心に覚」える——体現・体認する——ことを主張するのは、果たして如何であろうか。

これこそ彼が繰り返し、口を極めて否定した道家・道教思想の、哲学的な意味での最も根幹をなす思惟に外ならないのである。すなわち、彼のこのような「医道」の「會得」という考え方は、かのことばにならない我が身の真実を「道」という語彙によって表象し、その真髓の理解を修行としての「無為」の実践を通じて「道」の体得・体現として主張した老子や莊子、延いては、その流れを汲む道家・道教の思想の、正に中核をなすものであったと考えられるのである。

要するに、東洞は、一方において、道家・道教の思想を、単に不老長寿を追求する「神仙養性の説」であると捉えて、その限りにおいて、自分には縁なきものであると考えていたが、その実、一方において、彼のいわゆる「親試実験」を通じて「心に覚」え、これを「自得」することを旨とする彼の「医道」の考え方は、これ又歴然として道家・道教の思想の哲学的な本質に符合するのであった。東洞こそ実際のところ、正に老子や莊子らのいわゆる「道」の体現者だった、と言えると思うのである。

以上を要するに、東洞は、道家・道教の思想を「延命長寿」を目指して「逐世する」(「神仙養性の説」)であると捉え、畢竟「医道」の「湮晦」を召くものである、と考えていた。東洞のこのような考え方は、決して見当外れのものではなく、むしろ、道家・道教の思想の特徴的な一面を、よく捉えたものではあったと言えるであろう。とはいえ、更に深く哲学的に道家・道教の思想の本質に鑑みるに、東洞の「体認自得」・「黙して

之を知る」と言われた「医道」の考え方こそ、実は、へ之を視れども見えず、名づけて夷と曰う。……」(『老子』、第十四章)と言われ、遂に「道の道うべきは常の道に非ず。」(『老子』、第一章)と言われた老子の、延いては、道家・道教思想の根底をなすところの「道」の哲学的思惟に連なるものであったと考えられるのである。

かくして、東洞の医学思想を哲学的にいささか踏み込んで追究してみるならば、彼こそ正に伝統的な「道」の体現者の一人であった、と言えると思われるのである。

(平成十二年六月例会)

お雇い外国人医学教師ヴェルニッヒ (Albrecht
Ludwig Agathon Wernich 1843-1896) の生涯と
業績

蒲原 宏

明治七年十一月二十六日に来日し、明治九年十二月一日に離日した東京医学校お雇い外国人医学教師ヴェルニッヒについてはその生涯と学問的業績について断片的な記載はあるが、系統的な調査は欠けていた。

ヴェルニッヒは一八四三年七月一日、プロシア・エルビング(現・ポーランド領エルブラグ)に生まれ、ケーニッヒスベルグ(現・ロシア領カリニンングラード)の大学で医学学生となり、以後プラハ、ライプツヒ、ベルリン大学に学

び一八六八年に医師試験に合格。エリザベス病院の助手、普仏戦争の軍医体験をへて、一八七二年ベルリン大学で教授資格を得、一八七四年来日したのである。

一八七八年に帰国、再びベルリン大学で四カ年間防疫学、医学を研究し、一八八〇年から公衆衛生の現場で活躍する。一八八一年ベルリン地区公衆衛生官、一八八四年ケスリン地方衛生部長、一八九一年ベルリン警視庁衛生局長、一八九二年のベルリンでのコレラ防疫の指揮をとり、ドイツ国内の公衆衛生関係団体の多くの要職を兼任したが、一八九六年五月一九日糖尿病のため五三歳で病没した。前任者ミュレルと決闘をし、在日中の在日ドイツ人たちからの評価は低い。

しかし、東京医学校での講義内容は内科・婦人科(三宅秀通訳・長谷川元良筆記)とも濃い内容であった。

二カ年の滞在中に収集した資料による著作・論文は次の十四篇にも及んでいる。

- 1) Kakke disease (1876)
- 2) Klinische Untersuchungen über die Japanische Varietät der Beri-Beri Krankheit (1877)
- 3) Ueber Becken u. Entbindungsverhältnisse ostasiatischer Völker mit Demonstrationen (1877)
- 4) Ueber einige Formen nervoeser Störungen bei der Japaner (1876)
- 5) Ueber d. Fortschritte d. modernen Medicin in Japan (1875-76)